極彩色の死に水

冬原燎

うっすらと、甘い匂いがしていた。

聞こえるのは、電気が信管を走る音と、自分の靴音だけ。真っ暗闇の壁と天井、窓のない地下室はまるで棺のようだった。

つんと鼻の奥が痺れる。

夏の暮れとは思えないほどに冷たい空気が流れていた。浅く吐いた息が白く照らされ、そしてあっけなく消えていく。

その奥で、静かに発光している。

それは骨。

並べられた透明なガラスの中で、ただ、死んだ骨格だけが、紅く、碧く、光を放っていた。極彩色が揺れる。揺れても、彼らがはじめどんな姿をしていたのかなんて、それは僕にはもう、わからなくて、けれど、わからないことがきっと大事なことだった。

透明標本。

ほのかに漂う甘い匂いはホルマリンの匂い。

世界でもっとも美しい、墓場の名前。

＊

「まあた買うてきたんか」

と、先輩はあからさまに呆れた顔をした。

季節は夏、時刻は午後二時、外では凶悪なほどの日差しが真上から降り注いでいた。そのうえ蝉の焼かれるような鳴き声が延々と響いていて、涼しい室内にいても足取りは重たい。

金属製の階段を下ってすぐの扉を小さく叩き、返事を聞かずに開けた。瞬間さあっと冷えきった空気が体を撫でる。一瞬細めた目をゆっくりと開いて中を伺うと、そこには壁の両面が本棚に覆われた、相変わらずの地下室があった。

そして部屋の中央におかれたソファに寝そべったまま先輩は、顔だけを僕のほうにひょいと出し、僕が右手に小さめの紙袋をもっているのを見つけるやいなや「もういらん言うとるやろ……」と呆れ顔と一緒にぼやいたのだった。

「せやけど、毎回いらんいらん言いながら、ちゃんと貰ってくれるやないですか」

「あほ、お前が勝手に置いて帰るんやろ」

ほとんど恒例になった応酬をしつつ先輩が体を起こす。短い黒髪には少しだけ寝癖がついていて、よれた黒いシャツは胸元まではだけていた。面倒くさがりな彼のことだ、外から帰ってくるなりクーラーだけつけて、着替えるのもそこそこに今の今まで寝ていたのだろう。ふあ、と大きな欠伸をして、裸足でぺたぺたと部屋の隅のキッチンに向かった。ソファが空いたので扉を閉めそこに座る。「うわ温い。気持ち悪」と思ったまま零すと、「聞こえてんぞ」と低い声が飛んできた。

「ほれ」

それから黙ってしばらく待っていると、からん、と音を立てた透明のグラスが頭上から目の前に差し出される。いつもと同じ、ペットボトルのアイスコーヒーだった。

「どうも」

すでに荷物をおろした両手でそれを受け取る。僕が口をつけるのを確認してから、先輩もぼすんと僕の隣に体を預けた。

「……今度は何や」

不貞腐れながらもそうやって訊いてくれる、そういうところ。だから後輩が調子に乗るんですよ、と心の中で思いつつも口には出さず、僕はグラスから片手を離して紙袋を掴んだ。無言で押し付けると、わざとらしくため息をつき、先輩も片手で受け取りがさごそと封を切った。動きに合わせてグラスの氷がからころと鳴る。

袋の中から取り出されたのは、彼の手のひらに丁度おさまるくらいの透明な瓶だ。先輩がそれを頭上の照明に透かすと、水の影が顔に落ちた。

「んー。……金魚、か？」

それから当て推量に呟く。

「ええ」

その答えに僕は声だけで頷いた。

掲げられた瓶の中身は確かに金魚だった。けれど先輩が迷ったのは、それがもう、泳がないから。

頭を下にしてゆらゆらと赤紫色に漂うその体に肉体はなかった。

――いや、ない、わけではない。僕らには、見えない、というだけだ。

「綺麗ですやろ」

ちろ、と砂糖の入っていないコーヒーを啜りつつ目を伏せると、先輩はますます渋い顔をした。

「いや、まあ、そらそうやけどな……」

「けど？」

「……いや、もうええ」

そう言って先輩は立ち上がり、ソファの目の前にある壁のほうに足を向けた。そして壁に向き合うように備え付けられた机の左側、見覚えのないショーケースに手をかける。

そこにはとっくに数えるのをやめた透明標本が丁寧にずらりと並べられていた。

「ったく……置く場所なくて、こないだ新しく箱買うたんやで」

「はあ、すんません」

「思ってもないやろ」

「まったく」

「そこは嘘でも『そないなことあらしませんよ』って言えや」

まあ言うても信じひんけどな、と独りごちて、からからと透明のケースを開ける。中に手を入れて少しずつ標本をずらしていき右端を空け、そこに先ほどの金魚を収めると、またからからと静かに蓋を閉めた。改めてその箱を眺めると、綺麗に飾られたそれらがまるで他人事のように思える。もうこんなに死んだんやなあ、と僕は心の中で少し笑った。

「こんだけおると、もうちょっとした水族館みたいですね」

軽い気持ちでそう言うと、先輩はふっと鼻で笑い、腕を組んでから「あほ」と首を傾げた。

「死体ばっかで水族館は名乗られへんわ」

少し呆れを含んだその言葉に反射でむくれる。すると彼は仕方なさそうに微笑んで、

「なあ、今日このあと暇か？」

と訊いた。

「……用事はないですけど」

「なら、水族館、行こうや」

それは珍しい先輩からの提案だった。あまり気乗りはしなかったが、断る理由などなくて、意地に反してすぐにこくりと頷いてしまう。

「生きとるほうが綺麗やと思うで」

顔を上げると目を細めた先輩がまっすぐに僕の目を見ていた。全部わかってる、みたいな、この目が僕は苦手だった。「嘘だ」という言葉は吐き出せなかった。かわりに、

「性格悪」

とだけ、呟いた。

＊

日が暮れてから先輩の地下室を出ると、いつの間にか蝉はもう鳴いていなくて、遠くで電車の走る音が微かな振動になってここまで届いていた。その方向とは逆の道を歩き、少し古めの路線が通る駅から海の方へ向かう。十五分くらい電車に揺られて降りた駅の風は、ねっとりとした潮と夏の匂いを運んでいて、あっけなく都会を離れたんだなあと思った。

そこから水族館に着くまでのあいだ、僕たちはろくに言葉を交わさなかった。普段会話を投げてくれる先輩が黙ると必然的にこうなる。でもそれは機嫌が悪いせいじゃないことを僕は知っていた。

水族館の入口の門をくぐる。すっかり暗い足元を街灯がまばらに照らしていた。敷地内を流れる川沿いに道を歩いている途中、腕を組んで笑い合う男女の二人組とすれ違って、思わず「ああはなりたないなあ」と零すと、どういうつもりか、先輩も「せやなあ」と答えた。

受付で青色のチケットを二枚もらい、中に入る。

久しぶりの水族館は、思ったより、明るいような気がした。もっと暗いと思っていた。ゆらめく水面をぼうっと眺める僕の隣で、先輩が「きれいやろ」と覗き込む。おもしろくない。「別に」と素っ気なく答えながら、でも、確かにここは死んでいないからだとすぐにわかった。

「お、イワシの大群」
と、先輩が見つけるのにあわせてそちらに目をやる。フロアの突き当たりにある大きな円柱の中で、光る銀色が波打つように渦をつくっていた。
あまりに眩しくて顔を背け、先輩の横顔をちらりと伺う。彼はその無数の銀色を瞳に映しじっと目の前の円柱を見つめていた。僕が水槽を見ていないことにもきっと気づいていない。
「……好きなんですか、こういうの」
まっすぐな目。生きてるほうがきれいだと言った、理由が映っているように思えて小さく尋ねた。すると先輩はようやく視線をこちらに向け、ふっと口角を上げた。
「おん。焼いたら旨そうやろ」
——前言撤回、訊いて損した。
「はー信じられへんわ、何で水族館来といてそないなこと言うんですか」
「あれっふつう思わん？　ちゅうか、いや、お前には言われる筋合いないやろ」
「はあ？　全っ然ちゃいます、怒りますよ」
「え、ええ……すまん……」
僕が思い切りため息をつき遠慮なく理解できないという顔をすると、おされた先輩は反論しつつも心なしかばつが悪そうにぼそっと呟いた。するとその様子が何だか新鮮で、気持ちは引いていたのに思わず「ふはっ」と吹き出してしまった。しばらくくつくつと肩を揺らしているうちに、彼も彼で「自分が笑てるなんて、珍しもん見たわあ」などと頬を緩める。先輩があっさりいつもどおりに戻ったのが少し悔しかったので、
「それ他の人の前で言わんといてくださいね。恥ずかしいんで」
と僕は仏頂面を取り繕いつつ、先輩を置いて奥の階段を下りた。
階段を下ってすぐのトンネル水槽を抜けると、今度はしっかりと暗く、歩くのに支障が無い程度の照明だけがついたフロアに出た。
その壁を、ふわり、ふわりと柔らかい光が漂っている。クラゲの水槽だった。
赤、青、白、発光して、すいと泳ぐ姿はまるで、
「泳ぐ標本、みたいやな」
同じことを、先輩が言った。
「そうですね」
——ああ、そうや。
思い出した。水族館はもっと暗いと思っていた、それは、幼い頃の記憶がそうさせていた。
「僕も昔、そうやと思ってました」
「昔？」
「先輩、クラゲは死んだらどないなるんか、知ってます？」
問いかけは躱して逆に訊き返す。すると彼は軽く眉をひそめ、それからひと呼吸おいて、「さあ」と何ともとれない曖昧な返事をした。でもこれはたぶん、知っている声だと思った。
だから答えは別に言わなかった。聞いて、驚き悲しんだ子どもはもういないのだ。
すうっとおぼろげな赤紫が僕らの目の前を横切る。ちゃんと、美しいと思う。けれどその色はただの作られた光の反射だ。だったらそんなの、骨を染めるアリザリンと何が違うっていうんだろう。
「クラゲも、瓶に詰めて眺められたらえかったのになあ」
そしたら。
そしたら、ちゃんと、生きてるほうが綺麗だって信じられたはずだった。
——この感情を、きっと、殺さなくても。
「なあ」
先輩が口を開いた。声は少し掠れていた。水槽のガラスに映る先輩が、あの見透かすような深い黒の双眸で、ゆらめく半透明の僕を見ていた。
ほら、そうやって、先輩はまた優しくなるんだ。
そういう、ところが。
「……先輩、僕なあ」
遮って呟くと、彼は吐き出しかけた言葉と一緒に、小さく息を呑んだ。長く、重たい沈黙。その張り詰めた空気が苦しくて、諦めてふっと肩の力を抜いた。少し、笑う。
だって言えるわけないんだ。
言ったとして。
たとえ、綺麗に浮かべたとしても。いつか何も、何もなかったことになる、くらいなら。
とん、と軽く手の甲がふれた。ただそれだけの体温、さしてあたたかくもなく、すぐに溶けて、消えてしまって。
「やっぱり、死んどるほうが綺麗やと思いますわ」
ぐしゃり、ひしゃげて、感情がまた、死んでいく。
ああ、今度はどんな標本になろうかと、考えながら。

「――さよか」
ふいに、薄くふれていた手が、離れてそっと僕の後ろ髪を撫でた。
「え……？」
細くて、少し荒れている先輩の指。ぞくりと首筋が跳ねるのと同時に、僕の視界から水槽が、消えた。思わず開いた唇から言葉が漏れる間もなく。
浅く吐いた息は透明なまま、低い体温がふさいだ。
空気は、息が苦しいほど冷たく、ここに夏はなかった。

「あほやなあ」

ホルマリンの甘い匂いが、した。

FIN.